



オホホ

西表島の干立地区の節祭（しちまつり）に登場する人気者。悪い神様とされており、オホホホホ〜と奇声を発しながら札束を見せびらかし、観客たちに取り入ろうとしたり、ミルク様の子供を誘ったりするとか。



パントウ

パントウは、沖縄県宮古島で行われる悪霊払いの伝統行事。1993年に重要無形民俗文化財に指定されました。厄払いは誰彼かまわず人や新築家屋に泥を塗りつけて回るというもので、泥を塗ると悪霊を連れ去るとされています。



ダートウダー

小浜島の民俗芸能で、4人が黒い面を被って登場し、歌声に合わせていろいろな所作を見せますが、歌詞も、その所作の意味も。解明されていません。それを踊る者は貧しい者とされていたため、だんだんと嫌がられるようになり、この踊りは廃止されました。ところが近年、伝承文化の掘り起こしの中で、その歌と踊りが見直されるようになりました。



アングマ

石垣地方で受け継がれる『アングマ』は、あの世からの使者であるウシュマイ（お爺）とウミー（お婆）が花子（ファーマー）と呼ばれる子孫を連れて現世に現れ、家々を訪問し、珍問答や踊りなどで祖先の霊を供養する伝統行事で、そのときかぶる木製の面が『アングマ面』です。



マングナシ

八重山諸島の石垣島川平（かびら）に伝わる節祭（せちえ）にはマングナシという神が登場する。「マユ」とは「豊かな真の世」のことである。「ガナシ」は敬称。で、あわせて「真世の皆様」という意味である。石垣島ではマングナシの登場を境にして「節」が改まるとされ、これを「初正月」と呼んでいる。



スネカ

岩手県大船渡市三陸町吉浜で、毎年1月15日に行われる恒例行事。2004年に重要無形民俗文化財に指定されました。男鹿のなまはげと共通点があり、鬼に似たお面をかぶった役者が各家々をまわり、怠けている者への戒めを行います。囲炉裏やコタツに入ってばかりいて怠けて入る者の脛に付いた火の斑を剥ぎ取ってしまう、といった意味の「脛皮たくり」が「スネカ」の語源と言われています。

ミルク

ミルク行列や弥勒節を踊るときにかぶられる面。『ミルク』は、『ミロク』が沖縄方言に変化したもので、『弥勒』のことです。東方の海上から神船に五穀の種を積んでやってきて豊穡をもたらす来訪神とされています。



なまはげ

大晦日に秋田県の男鹿市と三種町、潟上市の一部の各家々で行われる伝統的な民俗行事。「男鹿のナマハゲ」として、国の重要無形民俗文化財に指定されています。冬に囲炉裏にあっていると手足に「ナモミ」「アマ」と呼ばれる低温火傷ができることがあり、“それを剥いで”怠け者を懲らしめ、災いをはらい祝福を与えるという意味での「ナモミ剥ぎ」から「なまはげ」と呼ばれるようになりました。

てんぐ 天狗

天狗は、日本の民間信仰において伝承される神や妖怪ともいわれる伝説上の生き物。一般的に山伏の服装で赤ら顔で鼻が高く、翼があり空中を飛翔するとされています。俗に人を魔道に導く魔物とされ、外法様ともいう。また後白河天皇の異名でもあった。



からすてんぐ 烏天狗

烏天狗は、大天狗と同じく山伏装束で、烏のような嘴をした顔、黒い羽毛に覆われた体を持ち、自在に飛翔することが可能だとされる伝説上の生物。小天狗、青天狗とも呼ばれます。仏法を守護する八部衆の一、迦楼羅天が変化したものともいわれています。

はんにゃ 般若

「嫉妬や恨みの籠る女の顔」としての鬼女の能面。一説には、般若坊という僧侶が作ったところから名がついたといわれています。あるいは、『源氏物語』の葵の上が六条御息所の嫉妬心に悩まされ、その生怨霊にとりつかれた時、般若経を読んで御修法（みずほう）を行い怨霊を退治したから、般若が面の名になったともいわれています。



こもて 小面

小面の「小」は小さいという意味ではなく、可憐さ、雅やかさ、初々しさなどを意味する。女性の美しさを端的に表現した面である。

ひょっとこ

ひょっとこの語源はかまどの火を竹筒で吹く「火男」がなまったという説や、口が徳利のようであることから「非徳利」からの説もあります。「出雲安来節」にもひょっとこ顔の男踊りとして、「ドジョウ掬い踊り」があります。出雲の国はかつて製鉄が盛んであり、その砂鉄採取が所作の源流とされ、炎と関係の深い金属精錬神への奉納踊りの側面もあったようです。



りょうおう 陵王

獅子舞のルーツとも言われている舞楽面陵王。中国古代の英雄で、軍略家として有名な軍人蘭陵王はその容姿があまりに優美でしたので、戦場で敵を驚かすために、わざと恐ろしい面をかぶり、自ら作曲した『蘭陵王入陣曲』を演奏しながら出陣したといわれています。



あめのみなかぬしのかみ

天之御中主神

天之御中主神は天地開闢（かいびやく）神話で宇宙に一番最初
に出現し、高天原の主宰神となった神です。その名が示すとおり
宇宙の真ん中に在って支配する神で、日本神話の神々の筆頭
に位置づけられています。そういう偉い神なのですが、その姿
はほとんど神秘的のべールに包まれているようです。



いざなぎのみこと

伊邪那岐命

伊邪那岐は、日本神話に登場する男神。天地開闢（かいびやく）
において神世七代の最後に伊邪那美とともに生まれました。伊
邪那美の兄であり夫。天照大神、月読命、須佐之男命などの神
を生み出しました。色々と説はありますが、「いざな」は誘う、「ぎ」
は男を表します。



いざなみのみこと

伊邪那美命

伊邪那美命は、日本神話の女神。伊邪那岐命の妹であり妻。別
名 黄泉津大神、道敷大神。天地開闢（かいびやく）において神
世七代の最後に伊邪那岐命とともに生まれました。色々と説は
ありますが、「いざな」は誘う、「み」は女を表します。



あめのうずめのみこと

天鈿女命

天鈿女命は、日本神話に登場する女神。岩戸隠れで天照大神が
天岩戸に隠れて世界が暗闇になった「岩戸隠れ」に登場する女神。
芸能の神様とされています。
日本最古の踊り子とも言われています。



いなせはぎのみこと

稲背脛命

島根県伊奈西波岐神社の御祭神。出雲国造の祖神、天穗日命の
御子です。
国譲りの神勅を大国主大神に伝えた時、稲背脛命が使いに出さ
れ、事代主命を呼び返し国譲りについての諾否を問いました。
国譲りが武力によらずして平和裡に解決された事は、稲背脛命
等の奔走の賜であり、その功績は大きいといえます。



しんとりそ

新鳥蘇

雅楽、舞楽の曲名。この舞を踊る時に付けるお面。
柔和な表情の人面をつけ、この舞にだけ用いる特殊な胃（かぶ
と）をかぶり、太刀を腰に、笏を手にもって舞います。
春日大社に収められている舞楽面 新鳥蘇は平安時代後期の作で
国の重要文化財でもあります。



きつね

狐

狐は古来より日本人にとって神聖視されていました。
江戸時代に入って稲荷が商売の神と公認され、大衆の人気を集
めるようになると、稲荷狐は稲荷神という誤解が一般に広がり、
またこの頃から稲荷神社の数が急激に増え、流行神（はやりがみ）
と呼ばれる時もあったようです。



あまてらすおおみかみ

天照大神

天照大神は、日本神話に登場する神。伊邪那岐命の左目から生
まれたとされています。皇室の祖神で、日本民族の総氏神とさ
れています。太陽を神格化した神であり、皇室の祖神の一柱と
されます。信仰の対象、土地の祭神とされる場所は伊勢神宮が
特に有名。天照大神、月読命、須佐之男命で三貴子と呼ばれます。



つくよみのみこと

月読命

月読命は、日本神話に登場する神。伊邪那岐命の右目から生
まれたとされています。月を神格化した、夜を統べる神であると
考えられています。天照大神、月読命、須佐之男命で三貴子と
呼びます。



すさのおのみこと

須佐之男命

須佐之男命は、日本神話に登場する神。伊邪那岐命の鼻から生
まれたとされています。海原を神格化した神であると考えられ
ています。八岐大蛇（ヤマタノオロチ）を退治した暴れん坊の
神様です。天照大神、月読命、須佐之男命で三貴子と呼ばれます。



たじからおのみこと

手力男命

手力男命は、日本神話に登場する神。力の神、スポーツの神と
して信仰されています。怪力を持つというイメージのある手力
男命は、昔から人々に人気があり、各地に手力男命が登場する
神楽が伝わりました。



しゅてんどうし

酒吞童子

酒吞童子は、丹波国の大江山、または京都と丹波国の国境の大
枝に住んでいたとされる鬼の頭領です。酒が好きだったことか
ら、部下たちからこの名で呼ばれた。他の呼び名として、酒頭
童子、酒天童子、朱点童子と書くこともあります。彼が本拠と
した大江山では龍宮のような御殿に棲み、数多くの鬼達を部下
にしていたといいます。



あかめ

赤目

山幸彦と海幸彦に登場する赤目。海幸彦の釣り針を飲んでしま
い、のどに引っかかって取れなくなってしまいます。このこと
が原因で山幸彦と海幸彦が対立してしまいます。



たぬき

狸

日本の狸は古来から森羅万象を司るものとして神格化されてい
ました。
しかし仏教伝来後は、神の使いとされる狐や蛇などの動物以外
は神格を失い、特別な能力を持つ獣というイメージだけが残さ
れた狸は、悪しき者または妖怪とみなされ、神秘的で恐ろしい
イメージを持たれるようになりました。

